

## 子供しかるな来た道だ

### 年寄り笑うな行く道だ

四時半になると、東京湾から上る太陽の朝日が強烈に部屋の奥まで差し込んでくる季節になった。高台たかだいにあるマンションの二八階の東部屋なので遮光カーテンがなければ、有無を言わず起こされる。眩まぶしいのに加えて、かなり暑くなる。

目が覚めたらカーテンを開け、それからガラス戸を開け、ベランダに出て朝日を浴びながら思いつき深呼吸するのが一日の初めである。都心でも空気が淀んでいないので、朝はとくにすがすがしい。筑波山が遠くに大きく見える。天気が良ければ房総の木更津あたりの石油タンク群も見える。

#### 「皇居東御苑」

数日ぶりに気持ちよく晴れたもので、突然、皇居東御苑に行こうと決めた。数日間、ちよつと歩きが少なく、それを取り返そうとも思ったからだ。

皇居は広い。都心の真ん中にこんなに緑濃い地域があるのかと改めて驚かされる。だいたい五キロメートル×五キロメートル（二四六六万平方メートル）の広さがある。



グーグル・アース (Google Earth) の衛星写真を見ると一目瞭然りようぜんである。「東御苑」は写真の矢印が指す約二二万平方メートルの堀に囲まれた右上の部分で、午前九時から午後四時半まで一般に無料で開放されている。休苑日は、原則、月曜日と金曜日。



昔、ここには「天守閣」や「本丸」があった。「松の廊下」もあった。この季節の見所は本丸付近より一段下がった低地に造られた「二の丸庭園」で、その入口付近の雑木林とさらに下がったところにある池の周りの花菖蒲が素晴らしい。

二十年近く行っていなかったが、一週間ほど前、ニュースで「東御苑」の花菖蒲が見どころになってると聴いて、行ってみようと思っていた。

平日の朝、都バスで九段下まで行き、そこから歩いて「平川門」から一番乗りで入った。そして苑内を隅から隅まで歩き回った。

「東御苑」への入口は三つの門であり、その一つが「平川門」である。これは太田道灌（二四二三〜一四八六年）の頃からあり、当時、門前は平川村と呼ばれる一帯で、そこから付いた名前だと言う。この門は江戸城の良（丑寅・北東）の方向、つまりおんみょうどう陰陽道<sup>おんみょうどう</sup>で鬼が出入りすると信じられている鬼門<sup>きもん</sup>の方向に当たり、城内の罪人や死人を出すのに使われたため「不浄門<sup>ふじょうもん</sup>」とも呼ばれていたという。本来なら、こんないわ

「陰陽五行（いんようごぎょう）説に基づいて自然現象を説明し人間の吉凶を判断するもの。陰陽二つの気の盛衰により万物の生成の変化を説く陰陽説と、万物を支配する元素として水火木金土の五つを考え、その盛衰で宇宙万物の変転を説く五行説とが融合したもので、それによって自然循環、災害、政権交代などが説明された。



れのある門からは入りたくはないのだが、あまり団体見学者が使わず混まない上に、今の自宅からの交通の便利が良いので使った。それに「不浄門」という名前とは裏腹に、大奥女中たちや御三卿の登城口でもあったというから、そんなに気にすることもないとも思った。

江戸城の北西にあるのが「北桔橋門」である。太田道灌時代は城の正門の橋だったようだが、徳川幕府になってからは、本丸に近い門のため、濠を深く石垣は堅固にし、さらに撥ね上げ橋とし、それを通常は上げていたという。なお、「桔」(きつ)という字には「堅くしまった実を付ける草木、きつく締まる棒」といった意味があり、「桔槔」(きつこう)は高く上がる棒の意味)というところ「撥ねつるべ」を意味する。多分、そこから「桔橋」を「はねばし」と読ませたのだろう。

そして東にあるのが「大手門」である。「大手」とは「城の正面、表口」といった意味で、文字通り、これは徳川家康が命じて新に造らせた江戸城の正門である。

「平川門」から入り、隅から隅までナツプザックを背負い、案内図を片手に歩き回り、十一時頃には腹が減ったので木陰のベンチに座って持つてきた梅干し入りの握り飯を食べ、ポットの茶を飲み、一服し、十二時前には日差しが強く暑くなったので、この正門の「大手門」から出て帰路に着いた。約一万六千歩の散歩だった。

昭和天皇の発意で武蔵野の面影を再現させるために昭和五十七年(一九八二年)から数年かけ、表土ごと移植する表土移植工法によって作られたという雑木林は見事に完成していた。昔に見たときには、まだなんとなく人工的な雰囲気は漂っていたけれど

三 田安、一橋、清水の三家。江戸中期、將軍家と御三家(尾張、紀伊、水戸の三家。それぞれ徳川家康の第九子、第十子、第十一子を祖とする。)との関係が疎遠になったため、八代將軍徳川吉宗は自分の二子に御三家に準ずる將軍家と密接な関係を持つ家柄として一家を構えさせ、九代將軍家重もこれにならった。田安家は吉宗の第二子、一橋家は吉宗の第四子、清水家は家重の第二子を祖とする。

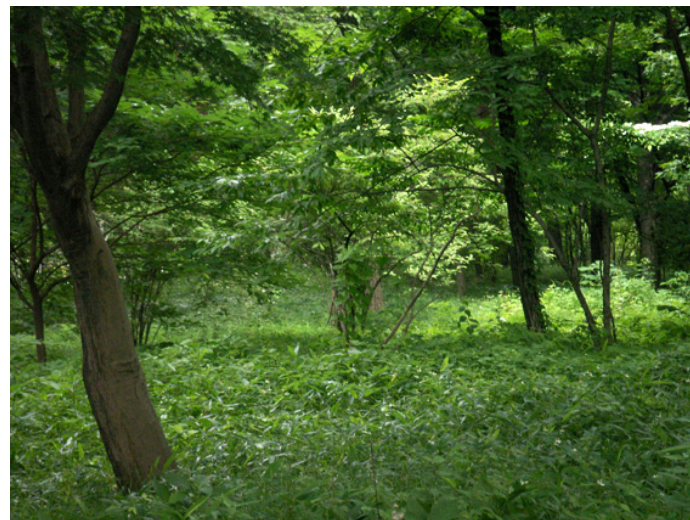


返ったら、同じようなタイプ  
が次から次とやってくるの  
が見えた。

もう早々に、この場から逃  
げ出すしかなかった。改めて  
僕よりもやや年配の老人パ  
ワーというか傍若無人に圧  
倒されて花菖蒲を觀賞する  
どころではなかった。

これにはさすがに閉口した。やり過ごせば何とかゆっくり鑑賞できるかと思つて振り  
返つたら、同じようなタイプ  
が次から次とやってくるの  
が見えた。

それに比べると、すっかり有名になった花菖蒲の方はたしかに綺麗なことは綺麗なだ  
けれど、ありふれていて、やや物足りなさを覚えた。それよりも何よりも人で溢れて  
いたのには参つた。まばらだった人がだんだん増え、花菖蒲のところには群がついて  
た。狭い道に高価なデジタル一眼レフを三脚で据えて断固として動こうとしない六〇、  
七〇歳代の何人もの男性。狭い道を塞ぎ、大声で綺麗だと叫びながら先を争つて携帯  
電話のカメラやコンパクトデジタルカメラで写真を撮りまくる六〇、七〇歳代の女性の集団。  
これにはさすがに閉口した。やり過ごせば何とかゆっくり鑑賞できるかと思つて振り



ど、歳月を経て様々な樹  
木と下草との自然の調和  
を感じさせるようになって  
いた。野草も生い茂り、  
まったく都心にいること  
を忘れさせてくれた。

こんな中を駆け回つて  
遊んでいた子供の頃を思  
い出した。

## 化野念仏寺

「子供じゃないだろう！」と注意するのも文句を言うのも堪えたものの、不快感は残って引きずっていた。しかし、戻りの道、再び雑木林ぞうきばやしの中を歩み始めたら、だんだん気分が治まってきた。

突然、「子供しかるな来た道だ。年寄り笑うな行く道だ。」という言葉が浮かんできた。同調する面がある言葉なのだけれど、現実はそうでもない。

目に余る行動などに直面すれば幼い子供でも叱しかるし注意するし、親が一緒であれば、その親を叱しかり注意する。若者も中年の大人に対しても言わずもがなである。うっかりすると逆ギレされて何をされるか分からないと自覚しているのに、ほとんど反射的にやってしまう。ところが僕より年上の正真正銘の老人になると途端とたんに対応に躊躇ちゆうちよしてしまう。叱しかることも注意することもできず、怒ることもできず、嘲笑ちやうしやうすることもできず、ただ不快感を覚えながら悲しくなってしまう。それでいて、結構、それが残って尾を引いて、やり場がないものだから困ってしまう。

しかし、雑木林ぞうきばやしの中の小道を歩いていたら、それも良いんじゃないかという気分きぶんに襲襲われた。

本当にいろいろな樹木や野草が好き勝手にごちゃごちゃに育っていた。漢方薬などには使われるものの独特の強いに匂いがあった庭には嫌われるドクダミも、無毒なのにドクイチゴドクイチゴ（毒莓）とかヘビイチゴヘビイチゴ（蛇莓）という響きの悪い呼び名を持つものも、可憐なツクサツクサ（露草）やアカマンマアカマンマ（赤飯・イヌタデ 犬蓼）などと一緒に育っている。僕の好物のミョウガミョウガ（茗荷）も灌木かんぼくの横で頑張っている。それでいて全体として調和の取れた心和こころなごむ雰囲気を醸かし出だしていた。手入れが行き届き見事な花を咲かせている花菖蒲の庭園とは対照的だった。



素直に「子供しかるな来た道だ。年寄り笑うな行く道だ。」という言葉が心にしみ込んできた。もう五年以上も前になると思う。京都の嵯峨野界限をゆつくり散策した。すっかりお上りさん気分です。有名な竹林から化野念仏寺、そして観光客向けのご洒落た店にも足を運んだ。嵐山では修学旅行気分です土産屋をひやかした。天竜寺や気に入っている大河内山荘にもきちんと行った。その時に手にしたあだしのねんぶつで、  
 化野念仏寺に置いてあった一枚の紙に、  
 この言葉が書かれていた。

豆腐

信仰は お豆腐のようになることです  
 豆腐は 煮られてもよし  
 焼かれてもよし 揚げられてもよし  
 生で冷奴で ご飯の菜によし  
 湯豆腐で一杯 酒のさかなによし  
 柔くて 老人 病人の お気に入り  
 子供や 若い者からも 好かれる  
 男によし 女によし  
 貧乏人によし 金持によし  
 平民的であって 気品もあり  
 上流へも好かれる  
 行儀よく切って 吸物となり  
 精進料理によし  
 握りつぶして味噌汁の身となり  
 家庭料理に向く  
 四時 春夏秋冬 いつでも使われ  
 安価であって ご馳走の一つに数えられ  
 山間に都会に …… ドコでも歓迎せられる  
 貴顕や 外客の招宴にも 迎えられ  
 簡単な学生の自炊生活にも 喜ばれる  
 女は特に 豆腐のようであらばいかぬ  
 徹した人は 豆腐の如く柔くて しかも形を崩さぬ  
 味がないようで 味があり  
 平凡に見えて 非凡。

(原文のまま)

わらわれて わらわれて  
 えらくなるのだよ。  
 しかられて しかられて  
 かしこくなるのだよ。  
 たたかれて たたかれて  
 つよくなるのだよ。

小供しかるな来た道だ。  
 年寄り笑うな行く道だ。

- 俗世間 つもりちがい十ヶ条
- 一、高いつもりで 低いのが 教養
  - 二、低いつもりで 高いのが 気位
  - 三、深いつもりで 浅いのが 知識
  - 四、浅いつもりで 深いのが 欲
  - 五、厚いつもりで 薄いのが 人情
  - 六、薄いつもりで 厚いのが 面の皮
  - 七、強いつもりで 弱いのが 根性
  - 八、弱いつもりで 強いのが 我
  - 九、多いつもりで 少ないのは 分別
  - 十、少ないいつもりで 多いのが 無駄

その時は、たしか「俗世間 つもりちがい十ヶ条」が面白いと思ってもらってきたのだけれど、それを身の回りの山積みを整理している中で見つけた時には、むしろ、この言葉の方が心に引つ掛かった。

同時に、どこかで読んだことがあると思ひ出した。気になると、その気持ちを止めることができないう性分で、書棚の心当たりの本を探しまくり、ついに岩波新書の永六輔著「大往生」  
 だったことを見つけた。

一九九四年発行の本である。その三十六頁にあった。

子供叱るな来た道だもの

年寄り笑うな行く道だもの。

来た道行く道二人旅

これから通る今日の道

通り直しのできぬ道。

これが全文らしい。そして、これは犬山<sup>三</sup>の寺の門前にあった掲示板から写したもので、妙好人<sup>みょうこうにん</sup>の言葉として有名だと書かれていた。妙好人<sup>みょうこうにん</sup>とは「優れた人。とくに浄土真宗の篤信者<sup>とくしんしや</sup>。一般に無名で学問のない人でありながら信心<sup>しんじん</sup>の境地では優れて高いところに達していた人。」といった意味で、多分、詠み人<sup>よ</sup>知らずなのだろう。

この本には、この言葉を巡る内輪話が紹介されていた。

これを黒柳徹子さんに読ませたら……

「アラ、年寄りは笑わなきゃいけないのよ。笑う年寄りの方が長生きして呆けないんですって……」

そしてもう一回読み直して、

「ごめんなさい。そうよね、年寄りを笑っちゃいけないわね」

円満解決。

とあった。

(二〇〇七年初夏 伴 友貴)